

※インターネット「はらまち九条の会」で、「九条はらまち」の全号を見ることができます。



九条はらまち

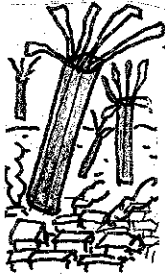
「はらまち九条の会」ニュース No. 9 5

2009(平成21)年3月10日(火)発行

＜64年前の1945(昭和20)年3月10日は、10万人の犠牲者を出した「東京大空襲」の日＞

日本の敗色濃い終戦の年の3月10日午前零時8分、アメリカ軍のB29爆撃機334機の大編隊が、房総半島方面から超低空飛行で東京の江東区内に侵入。午前2時37分米軍機の退去する、わずか2時間半に合計1,783トンの爆弾や油脂焼夷弾(ゆししょういだん)を投下。またたくまに下町の深川・本所・浅草・日本橋・神田など人口密集地帯は火の海となり東京市中の40%が焼失、逃げ場を失った人々およそ8万4千人(民間の調査では10万人)の市民、つまり非戦闘員が殺されました。しかしそれから64年経っても、国や都による資料館も記念館もなく、犠牲者の遺骨も放置されたまま、被災者への救済もありません。

米軍が日本家庭の屋根を突き破り燃焼させるため開発した油脂焼夷弾。東京大空襲で大量に使用。



焼け野原の上野駅周辺の記憶

原町区国見町 大槻千鶴子

原水禁世界大会で広島へ

「すべての婦人運動は平和運動で完結する」という、婦人運動の先駆者榎田フキさんの言葉に感銘をうけ、一九九八年八月六日の原水禁世界大会(広島)に参加しました。

蒸しかえるような広島町の町並は、以前から原爆被災地の写真などで、私の脳裏に焼き付いていたあの焦土化した広島とは違って、ビルが建ち並び地方都市とは思えないほどのたくましさを感じました。

原爆供養塔に涙がとまらず

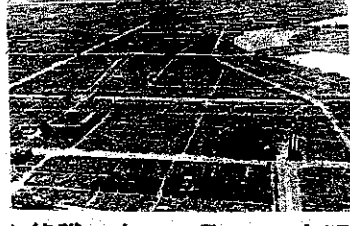
元安川の辺りには無名の墓碑がひっそりと立ち並び、原爆ドームをはじめ平和公園内の他の遺跡も、核兵器廃絶の重要性、緊急性を無言のうち訴えているように胸にせまりました。とりわ

け七万人の遺骨が眠る原爆供養塔の前では、涙がとまりませんでした。

数十万の犠牲者の声が蝉しぐれとなり、背中を押されるように、資料館に足を踏み入れました。当時の被爆状況、とりわけ子どもたちの焼けただれたケロイド状の惨状を見て、原爆の恐ろしさ悲惨さを身にしみて感じ、あの地獄を生き抜いた、被爆者の血と骨の叫びが聞こえるようでした。

神奈川県の小学一年生だった私友達が疎開していった淋しかったその時は、古びたセピア色の写真を見るように、同じ状況が脳裏をかすめました。

当時、私は小学校一年生、神奈川県の逗子市に住んでいましたので、直接戦禍に身をさらすことはありませんでした。でも何時もランドセルの上から防空頭巾と水筒を



▲終戦の年の3月10日未明、一両わすか2時間半の空襲で、東京、両国付近、右手は隅田川。



▲焼け焦げた遺体の山。警視庁の石川光陽が撮影。空襲の惨状は石川が撮影した33枚の写真のみ。戦後GHQの引き渡し命令を拒否し自宅の庭に埋めて保管。



◀「東京大空襲」の無差別攻撃を指揮した力一チスルメイ少将。昭和39年、日本政府は「航空自衛隊の育成に貢献した」との理由で勲一等旭日章を授与した。

下げ、胸に住所と名前、血液型が書かれた白い布をつけて、集団で登下校をしていました。やがて疎開が始まり、友達が櫛の歯が抜けるようにいなくなるのが淋しかったことを覚えています。父の仕事の都合で田舎に疎開することも出来ず、母が毎日のようにリュックを背負って買い出しにいった、求めてくる少量のお米や芋で、ひもじさや不安に耐えていました。

敗戦の年の三月十日、米軍による東京大空襲があり、下町は焦土と化した。私は記憶にありませんでしたが、東京の方の空が赤く染まり、飛行機が旋回し飛んでいったと、あとで知りました。父の指の間から見た空襲後の東京防火用水で亡くなっていった母子

明け方父が帰ってきて、父の実家があるこの原町へ疎開することになり、三月下旬の終業式も待たずにランドセルを背負って、着の身着の儘で汽車に乗るところまで歩きました。

東京の上野の近くは焼け野原となり、大勢の人々が為す術もなく空ろな目をして彷徨う姿を、父は私に見せまいとして大きな手で私の目を覆うのですが、その指の間から見た光景は、今でも鮮明に記憶に残っています。子供を背負った母親が、防火用水桶の中に頭を入れて亡くなっている姿に、足がすくんで動けなかったことを覚えています。

(裏面へ)

(表のページより)

疎開先の原町でも空襲にあう

ようやく汽車に乗れましたが、途中何度も空襲にあい汽車が止まり、そのつど線路の脇の草むらや林の中に身を潜め、何時間もかけて原ノ町駅に着きました。

高平の親戚の離れに疎開してからも、空襲で山に避難したり、防空壕に入って飛行機が過ぎ去るのを待ちました。

三人の子を残して姉は病死

八月十五日の終戦を期に、東京に住んでいた長姉も、空襲の時に幼い三人の子供を一人は背負い、残る二人の手を引いて、防空壕に入るときに胸を強く打ち、肋膜炎を患い、夫の実家に帰ってきました。でも甘えることもできず、病を隠してミシンを踏み、仕立てもので得たわずかなお金で子供を育てていました。ところが、復員して帰ってきた義兄と入れ違いに、北原の病院に隔離され、三人の子供に会うこともできずに、姉はこの世を去りました。

また、私の疎開先の親戚の息子さんも終戦間近に戦死の公報が入り、若いお嫁さんが幼い子供を抱きしめて、声を限りに泣いていた姿を今でも思い出します。

夢も幸せも人生をも奪ってしまう戦争

あれから六十四年、戦争によって女の夢も幸せも人生をも奪われた女性の数は測り知れません。今でも地球のどこかで紛争がおこり、テレビで報道されない日はありません。戦禍に逃げ惑う女性や子供たちの、悲しみと怒りに満ちた目を見る度に憤りを覚えます。

平和の尊さを語り継いでいきたい

いつの世も、戦争で傷つくのは弱者であり、子供や女性です。次の世代に戦争の悲惨さや、平和の尊さを語り継いでいくことが、大勢の戦争犠牲者の基に生きてきた私たち世代の責務ではないでしょうか。

原町市の「非核宣言」は一九八五年に、私たちが市民の運動で成立させたもので、婦人大会で「原町はたいしたもんだ」と会場で大拍手をされたこともあります。それが合併で消えてしまったというのはおかしな話で、怒っていました。

(はらまち九条の会 会員)



東京都歴史教育者協議会編『東京修学旅行ハンドブック』より

東京・両国横綱町の『江戸東京博物館』やその北の『東京都歴史館』には、関東大震災や大空襲の資料が展示され、遺骨もひっそりと納められています。近くの『朝鮮人犠牲者追悼碑』は震災で「朝鮮人が暴動を起こす」というデマによる虐殺の碑があります。また墨田川の言問橋の欄干には、今でも空襲の焼死者の体の脂で黒い跡が残っています。

事務局より

講演会のチケット購入・販売のご協力、ご出席をよろしくお願ひいたします

・4月19日(日) ・会場：サンライフ南相馬 <お手伝いできる方は、12時30分にご集合下さい>

●「はらまち九条の会」の集い(総会) 1:30~2:30 (開始時間を30分早めました)

●小森陽一さん講演会 3:00~4:30 (30分早く終了します)

高校生以下は入場無料です。・演題：『なぜ憲法第9条は大切か ~最近の改憲動向は?』

入場チケット 300円 ○一般市民の方にも入場していただきたく、お勧めください。

「はらまち九条の会」事務局員連絡先 (市外局番は TEL0244)

○平田慶肇会長 TEL24-1211 ○山崎健一事務局長 TEL22-8631

○石田賢二 TEL22-4037

○井上由美(会計) TEL22-7511 FAX26-0892

○早坂吉彦 TEL22-0326

○番場恵子 TEL22-0715

